

# 高校 教師の心得

第②回

## 授業・教材研究 ——教師は「授業する人」



監修  
**服部 次郎**

(はっとり・じろう) 東京女子体育大学・短期大学教授。筑波大学附属坂戸高等学校教諭、同校長、筑波大学教授などを経て、2006年4月より現職。全国高等学校長協会理事など公職を歴任している。

学園ドラマの主人公はよく、生徒と触れ合う部活や生徒指導などの場面で感動的なシーンを見せますが、授業の場面ではほとんど活躍を見せません。

それは、授業ではドラマになるような面白いことが起きないからだと思いますが、実際には、教師の仕事は、そのドラマになりにくい授業が中心であって、部活や生徒指導でドラマチックに活躍する時間はそれほど多くはありません。

くれぐれも、部活や生徒指導で生徒と感動的に触れ合うカッコイイ教師像だけを夢見て、教師を目指してはいけません。

### 教師の仕事の中心は授業

教師が学校で過ごす時間の大半は、授業に費やします。公立・私立や地域の違いで多少の差異はありますが、高校教師の週当たりの授業持ち時間は18時間前後です。ということは、1日につき3～4時間、授業をしていることになります。

ただし、これは教室で生徒に対して授業をしている時間です。1時間の授業をするためにはその倍ほどの時間を授業準備にかけます。

つまり、教師の仕事の大半は授業にかかわる時間であり、教師になるということは、「授業する人」になることだということを肝に銘じてください。

### 教育実習で最も大事なものは 学習指導案を書くこと

授業というものは決してアドリブではなく、常に事前に構想され準備されて、周到的な学習指導案にのっとって実施されるものです。

皆さんのうちの多くは、大学の教科教育法で学習指導案の書き方を学び、教育実習では学習指導案の細案を書いて、指導教諭に見てもらいたいと思います。指導教諭は、学習指導案と実際の授業を比較し、学習指導案で構想したように実際の授業を運営できたか、もしも運営できなかったとすれば、学習指導案か実習生自身のどこに問題があったのかを見て、講評や指導を行います。

このように、教育実習生にとって、授業の構想を練り、学習指導案の細案を書くということは最も重要な仕事です。しかし、実は専任の教師になってからは、教科研究会などで研究授業を公開するときなどを除けば、学習指導案の細案を書くことはめったになくなります。

### 授業には絶えざる事前準備 (=教材研究)が必要

それでは専任の教師は学習指導案を書かなくていいのかというと、決してそうではありません。大学の教科教育法で習ったような、形式の整った学習指導案の細案は書きませんが、教師は皆、自分なりの方法・形式・内容で「授業ノート」を作ります。これを学習指導案の略案といいます。自分だけのために作るこの「授業ノート」を、教師生活を通じてどれだけ深めていけるかが、教師の質を決めるといえます。

「授業ノート」には、授業の前には略案を書き込み、授業の後にはその授業を振り返って改善を加えていきます。授業の事前準備を教材研究といいます。教師は絶えざる教材研究によって授業内容を深めていかなければなりません。

私自身を振り返ってみると、高校教師になりたてのころは、まず教科書に書かれている内容を理解して自分のものにするだけで精いっぱいでした。大学を出るまでに学んだことなど、教師になって教えなければならない教科内容のごく一部でしかなかったのです。

一通りの教科内容を理解し、自分なりの年間指導計画が作れるようになるには少なくとも3年はかかります。それをさらに深めていって、自信を持って授業ができるようになるには、10年はかかると思わなければなりません。

### 「ごめん、次までに調べてくる」 と言える勇気を持つこと

若い教師にとってつらいことは、教科書の内容もよく理解できていないうちに、一人前の教師として1人で授業しなければならないことだと思います。必死で「授業ノート」を作りながら懸命に授業をこなしていく中では、うろ覚えの、理解が不確かなことも教えなければならないこともあります。

そういうときに、生徒から鋭い質問を浴びせられることがあります。生徒は教師の不安を見透かして意地悪に質問するものです。そういうとき、教師のメンツや見栄で、適当なことを言っておまかしてはいけません。正直に「ごめん、そのことは今はよく分からない。次の授業までに調べてきて確かなことを教える」と言える勇気を持ちましょう。

「なんだ、先生分からないんだ」と生徒に冷ややかに見られることは、確かに教師としては屈辱的なことです。しかし、不確かな適当なことを言ってその場をごまかすことは、不誠実で無

(左ページ)	(右ページ)
●授業前の教材研究で以下を書き込む。行間を空けて、追加・訂正をしやすくしておく。	●授業後に以下を書き込むための余白スペースにする。
①板書事項 (これが導入・展開・終末の指導過程に沿った略案になる)	①発問に対する生徒の反応や質問など
②補足事項 (板書はしないが、説明に必要な事項。参考となる図表はコピーして張り付ける)	②授業実施後の反省点 (説明の不十分だった項目、説明の順序を入れ替えた方がいい部分など)
	③次の授業への課題など
* 授業の在り方は校種、教科・科目によって異なるので、「授業ノート」にも定型はない、自分なりのオリジナルを作ればよい。 * 近年は「授業ノート」をパソコンの電子ファイルとして作ることも多い。書き換えや保存が容易なので、大いに活用すべきである。	

#### 「授業ノート」の記載例 (公民科の場合)

責任な嘘をつくことであり、たとえ教師でなくとも人間として許されないことです。ましてや、常に生徒に正しい在り方を示さねばならない教師には絶対に許されないことであり、授業者として決してしてはならないことなのです。

たとえ一瞬の屈辱を感じたとしても、教室から戻った後、参考書を調べまくって完ぺきに理解し、次の授業で自信を持って説明して、生徒が「よく分かった!」と言ってくれば、屈辱などすっかり忘れて、もっと勉強しなければと前向きな気持ちになります。

教材研究を長年積んできたベテラン教師になっても、生徒の質問に答えられないことはいくらでもあります。そのくらい、知識世界は広くて深いということですが、教材研究を深めて自信が持てるようになった教師は、生徒の鋭い突っ込みにも「それは知らなかったなあ、次までに調べてくるわ」と気軽に明るく言えるようになります。生徒も、「あの先生でも分からないんだから、勉強するのは深いものなんだな」とむしろ感心するのです。

知識世界に極みはありません。だから、教師は一生勉強を続けなければならない仕事なのです。

### Point!

#### 高校教師の「授業・教材研究」

- ①授業には、その倍ほどの授業準備が必要
- ②学習指導案の書き方は教育実習のうちにしっかり学んでおくこと
- ③教師の質は、「授業ノート」をどれだけ深めていけるかで決まる
- ④分からないことが恥ずかしいのではなく、  
分からないことをごまかすことが恥ずかしいのだと肝に銘じよう

★今回は教育方法と評価を取り上げます。